

NHK 大河ドラマ ”鎌倉殿の13人“ をわかりやすく見る 千葉氏を語る会

登場人物	役者	どんな人？
北条義時	北条 小栗 旬	時政次男、兄宗時戦死のあと父時政の右腕となって活躍
北条時政	北条 坂東弥十郎	政子、義時の父、初代執権、室牧の方の娘婿、平賀朝雅を四代目に 將軍にすべく実朝の追い落とし画策を政子、義時に反対され追放されそ の後出家す
中原親能	川島潤哉	下級官人、中原広季の子、大江広元の義兄、文官の才を認められ 公文所の奇人の一員
大江広元	文 栗原英雄	朝廷の官人を務めていた文官、政所の前身公文所別当として手腕 発揮、政所設置後は初代別当をつとめた。
二階堂行政	官 野中イサオ	熱田大宮司に血をひく頼朝の縁戚、鎌倉に下り二階堂に居を構え 行政その子行光は政所幹部として代々世襲す
三善康信	小林 隆	問注所執事、京の下級官人の家に生る。母が頼朝の乳母の姉妹という 関係 から下向 した
三浦義澄	佐藤 B 作	相模国三浦庄を本拠とし、駿河、伊豆、武蔵率いる大武士団、頼朝の 挙兵時、畠山氏と対決し、その後海路安房へ渡り頼朝に合流した。
和田義盛	源 横田英司	侍所別当 三浦義明の子、義宗の嫡男 本家を継がず相模国三浦郡和 田に本拠、和田姓を名乗る、義澄は叔父、石橋山の戦より頼朝に従っ た。幕府開設当初頼朝に重用され初代侍所別当に指名される等活躍 した、頼朝死後起こった 泉親衡による謀反に子息や甥が関係した事 もあり執権 義時との関係も悪くなり、ついに義時率いる 幕軍と対決する 事となり同門の義村の裏切りもあ って敗退、一族と共に 討ち死にした
安達盛長	野添義弘	比企尼娘婿、頼朝の伊豆肺流から付き添い挙兵後も側近中の側近、 娘は源範頼の妻
藤九郎		
梶原景時	中村獅童	侍所、所司(次官) を務めた文武に通 じる有力御家人、頼朝の命にて 広常を暗殺した。頼家が頼朝の後を継ぐと、頼朝の側近であった景時と 他の御家人の対立が顕在化され、景時が結城朝光について讒訴した事 が契機になり66人の御家人が署名し た 景時弾劾状が作成され鎌倉か ら 追放 された。
八田知家	市原隼人	下野宇都宮宗綱の四男、頼朝の推挙なく官職に就いたことを咎められ 謝罪のあと 蘇我我兄弟の仇討に呼応した大掾氏討ち、認められた。 後の建仁3年頼朝の叔父にあたる阿野全盛(頼朝の異母弟)を謀反の 罪で誅殺している。
比企能員	佐藤二郎	比企尼の甥、のち養娘若狭の局は頼家の妻、時政の追討謀義したとい ことで殺害された。時政は、一幡(若狭局の子)も殺害した。
足立遠元	大野康広	武蔵国足立郡の出、平治の乱で頼朝に加勢、挙兵後武蔵国へ入った 頼朝に参陣した、文武両道に優れ、その才を買われた。

氏將軍に近き有力御家人

登場人物 “13人衆” 以外の主な人達 (1)

登場人物	役者	どんなひと？
源 頼朝 政子 三浦義村 大庭景親 千葉常胤	大泉 洋 小池栄子 山本耕史 国村 隼 岡本信人	源氏頭領 頼朝の妻 三浦義澄三浦氏当主の子 大庭氏当主（平家側） 石橋山の戦で源氏に勝つ 下總千葉氏当主、石橋山の挙兵戦で敗退し、房総へ逃げてきた 頼朝を最初に加勢協力し鎌倉幕府成立に貢献、頼朝との信頼関係結んだ
上総広常	佐藤浩市	上総氏当主、頼朝が石橋山の戦で負け房総へ逃げて来た折 加勢協力を要請されるも直ぐに良い返事せず二心で頼朝に面会、 結局は協力することになったが信頼関係築けず後暗殺される事 になった
伊東祐親 八重姫 源 義経	浅野和之 新垣結衣 菅田将暉	伊東氏当主 八重姫の父 伊東祐親の娘、頼朝の最初の恋人 頼朝の異母弟、平氏追討で活躍、しかし頼朝の意にそぐわず 追討されことになった
畠山重忠	中川大志	武蔵国畠山を本拠とする武士団、桓武平氏の流れをくむ秩父平氏、 平家側であったが房総に逃げた頼朝が勢いを得ると他の秩父平氏 と共に臣従した、重忠は鎌倉武士団の鑑、人気絶大、源平合戦の 一の谷の戦や奥州合戦でも先陣を務め、鎌倉軍の中核を担った しかし頼朝の死後武蔵の国の支配を巡り対立した北条氏の陰謀 により嫌疑をかけられ子息たちと共に討ち滅ぼされた
北条宗時 源 頼家 源 範頼 比企尼	片岡愛之助 金子大地 迫田孝也 草笛光子	義時の兄、石橋山の戦で戦死 頼朝の子、第二代将軍 頼朝の弟、平氏追討で活躍す 頼朝の4人の乳母の1人、夫比企氏は頼朝の最も信頼する側近、 3人の娘は頼家の乳母、娘婿の比企能員は13人衆の1人、頼朝 の伊豆配流中の20年間扶助した、頼朝は比企尼の忠節に報い 鎌倉に住ませた（比企谷）
牧の方(りく)	宮沢りえ	北条時政の後妻、娘婿の平賀朝雅を四代将軍にするべく実朝追い 落しを画策した 時政は牧の方の言い分を实行しようとしたが 政子、義時の反対にあい時政は失脚、後、出家させられた
武田信義	八嶋智人	頼朝の協力要請を受け富士川の合戦で頼朝軍の到着以前に追討 軍を退けて、合戦後武田は駿河を得一緒に戦った安田義貞は遠江 に支配地を拡大した

参考文献 ; 戎光祥出版社 “図説鎌倉北条氏” 野口 実著
戎光祥出版社 “図説鎌倉幕府” 田中大喜著
宝島発行所 “鎌倉13人衆の真実” 本郷和人著

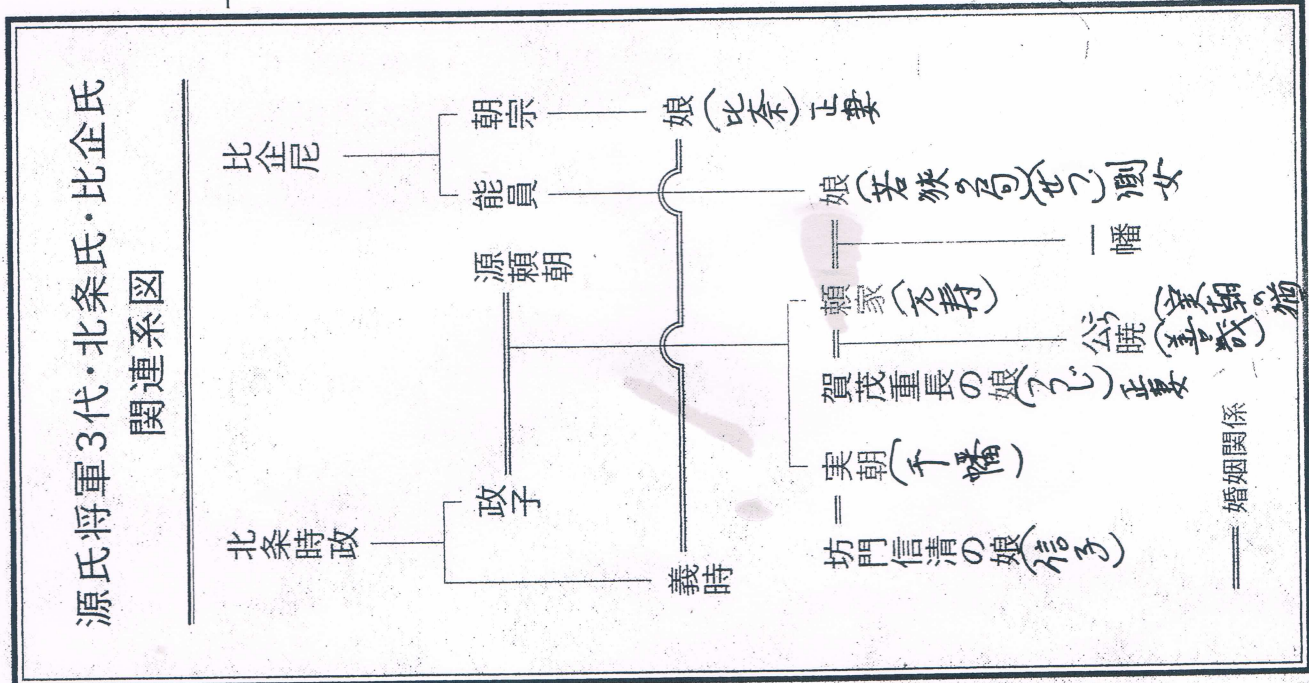
登場人物 "13人衆" 以外の主な人達 【2】

登場人物	役者	どんなひと？
源 頼家	金子大地	頼朝、政子の子、第二代将軍、幼名万寿、18歳で頼朝没後 鎌倉殿となる 頼家を補佐する宿老 13 人による評議が始まると頼家は自身の軽視と捉えて 独断的な行動をとり始める。
北条頼時 (泰時)	坂口健太郎	義時の長男、時政、義時を支え北条一族からの信頼厚し 幼名、金剛 烏帽子親、頼朝、名前の一字を与えらる、 女は義時側室(阿野局)
北条時連 (時房)	瀬戸康史	義時の異母弟(3男)、兄同様北条一族の信頼厚く頼朝政治を支え、頼朝 没後 鎌倉殿となった頼家の側近となる、頼家が若年で未熟なことからその 行動に目を配る。 頼家の後を 実朝が鎌倉殿となると、義時、泰時親子と 共に実朝政治を盛り立てる
アノセンジョウ 阿野全成	新納慎也	義朝の7男(頼朝異母弟)、幼い頃 京醍醐寺に預けられる、頼朝の挙兵に 加勢、妻は義時の妹、実衣、ト占に通じ方位の吉凶を占う等頼朝に信厚い 頼朝の臨終に際し、北条時政より次の鎌倉殿にと推されその気になるも、 義姉政子は頼家を推す、のち自らが乳母夫を務める頼朝の次男、実朝を 鎌倉殿に画策し失敗し、流罪となる
ミイ 実衣 大姫	宮澤エマ 南沙良	義時の妹、同上 阿野全成の妻、 政子の次男(千幡)実朝の乳母 頼朝、政子の間に生まれた長女、6歳の時人質として鎌倉に送られてきた 木曾義仲の息子義高に出会い、慕い婚約、しかし義高は父頼朝の命で殺さ れる。その傷心を抱えて生きた女性、その後頼朝に伴われて後鳥羽天皇 への入内工作で上洛の折、母政子と丹後局と対面、自身にかかる重責に さいなまれる中で病に倒れ、20歳の若さで没する。
せつ(若狭局)	山谷花純	源頼家の側女、比企能員の娘、父の政略により頼家と結ばれ一幡を生む、 しかし頼家の愛情は源氏の血をひく娘、つつじに向かい つつじが正妻に、 つつじにライバル心を燃やす、のちに北条家と比企家の抗争に巻き込まれ 一幡と共に悲運をたどる
つつじ	北 香那	源頼家の正妻、父は三河武士の賀茂重長、母は頼朝の叔父、源為朝の娘 重長は戦死した為 戦友の三浦義澄に預けられ義澄の嫡男、義村の仲介に より頼家の寵愛を得て正妻となる。 頼家との間に生まれた善哉は後に公暁と 名を改め頼家没後、頼家の死は実朝が手を掛けたとの怪情報が出、それを 信じた公暁は“親の仇はかく戦ったぞ”と言ったとされるなど悲劇が残る事 になった。
ヒナ 比奈	堀田真由	比企能員の姪、義時の正妻、能員とその妻 道は比奈を頼朝の側女すれば 比企家の地位がより盤石なものになると画策、頼朝は若く、美しい比奈を気に いるが政子の手前もあり比奈を義時の妻に提案
道	堀内敬子	比企能員の妻、夫能員の出世を生きがいとし、台頭著しい北条家にたいし ライバル心を燃やす、頼朝の嫡男万寿(頼家)の乳母に任命された道は万寿 の養育に腐心、阿野全成と実衣夫婦が頼朝の次男 千幡(実朝)の乳母夫 に任命されると 北条家への対抗心を益々募らせる。能員の姪 比奈を頼朝 の側女にすべく夫をけしかける。

登場人物 ”13人衆“ 以外の主な人達 (3)

登場人物	役者	どんな人 ?
巴御前	秋元 才加	木曾義仲の愛妾、女武者として平家軍と戦い義仲の上洛に貢献、しかし義仲は盟約を交わしたはずの頼朝に攻められ討ち死に、頼朝の長女大姫と婚約した嫡男義高は頼朝の命により殺された、大姫の傷心を慰めたのは巴御前であった。
後白河法皇	西田 敏行	政界遊泳と権謀術数に長けた老獪な政治家、二条天皇に譲位後院政を開始、平家による武家政権の樹立から頼朝による鎌倉幕府の成立に至るまでのキャスティングを握れたのは運が良かったからで後白河の資質によるものでないと言うのは近年の歴史的評価。
源実朝	柿澤 勇人	三代目鎌倉殿、“金塊和歌集”の作者として知られる、歌人。1209年親政を行う。統治者として責務を果たす政策を次々と打ち出し将軍としての自覚を持っていた、朝廷との協調路線を推進する為積極的に官位を受けたが、朝廷に接近しすぎる事を危惧した義時は安易に官位を貰わぬように諫めたが、意に介さず、この様な実朝の行動が義時との間に軋轢を生む事になった。
公暁 (幼名善哉) せんがい	寛 一郎	源頼家と正室つづじの間に生まれる、5歳の時父を亡くす、政子に養育され乳母夫は義村、後実子のない実朝の猶子(養子)となる、12歳で出家近江円城寺で修業し、18歳で鎌倉へ戻り、祖母政子の意向を受けて鶴岡八幡宮寺の別当となる、そして、あの雪の夜に 実朝を暗殺、しかしこの動機には謎が多くはっきりしないが、黒幕としておかしい行動から義村や義時の名が、信疑の程は判らぬが噂にはでてる。
後鳥羽上皇 (朝廷での力を握る) (朝廷文化、武術、経済力を背景に威信向上) (自前の軍事力保有) (幕府への影響力) (承久の乱 前夜)	尾上 松也	高倉天皇の第四子、平家一門系 安徳天皇が都落ちした後4歳で即位(三種の神器は平家方にあり後鳥羽天皇は神器無き即位)即位後は祖父後白河法皇の院政が続き、崩御後は源頼朝に近い関白九条兼美が朝廷の実権を握るがその後の政変で力を失うと 後鳥羽の外戚である土御門道親が権勢の座を奪取すると 後鳥羽は 為仁親王に天皇の座(土御門天皇)を譲り、上皇として院政開始、後鳥羽は蹴鞠、和歌のみならず文武両道に通じていた、又豊富な荘園経営による確かな経済基盤があり上皇の威信は強まっていった、その時代の権力者が軍事力を通じて政治的実権を握った歴史を目の辺りにし朝廷に軍事力を持たせる事の必要性を認識、上皇はそれまで朝廷が自前で組織していた“北面の武士”加えて“西面に武士”と呼ばれる集団を組織して軍事力の更なる増強を図った。三代目鎌倉殿 実朝への接近(官位、和歌、妻を迎える等)緊密さを強める事により、朝廷と鎌倉幕府は密接な関係を築き、天皇を中心とした体制作りを改めて固めようとの画策が見え始めた中での 実朝の暗殺と黒幕とされる北条氏との対立関係が緊張を高めている。

出来事	どんな事
<p>承久の乱</p> <p>(尼将軍(政子)の 歴史的な演説)</p> <p>「頼朝の恩は 山よりも高く、海よりも深く……」</p> <p>(戦後処理)</p> <p>(乱後の体制)</p>	<p>承久3年(1221年)、後鳥羽上皇は”鳥羽離宮の城南寺で流鏑馬揃いを催す”と称して畿内や近国の武士を招集する、この時鳥羽離宮の馬場殿には1700騎余りが参集、この折、幕府の出先である京都守護の大江親広(大江広元の子)は上皇方に加わったが北条の外戚として重用されていた伊賀光季(伊賀の方は義時の後妻)は招聘に応じなかった。後鳥羽上皇は北条義時追討の宣旨、院宣を発す、まずは伊賀光季の館が襲撃され少数の兵で立ち向かうが敗れて討ち死にす、後鳥羽は三浦氏、小山氏、武田氏など東国の有力御家人にも義時追討宣旨を発した。</p> <p>一方、幕府方は京からの上皇挙兵の報を知らせる使者が鎌倉へ入った。又上皇方三浦胤義から兄の義村へ決起を促す書状が届くも、義村は返事もせず義時に忠節を誓った、幕府の評議には義時を始めとする執権一族、御家人たちが集い、政子の歴史的な演説があり 武士達は”一命をもって恩に報いようと一致団結して立ち向かう”ことを決断した、決戦はひと月ほどの短期間に終わる、主戦場は「美濃国墨俣」「近江国瀬田」「山城国宇治」、東国武士の多くは幕府方につき、すぐに京都へ攻め上った為、上皇方は十分な迎撃態勢を整える間もなく敗れた。</p> <p>乱を機に 公武の関係が逆転する、 上皇方の武士や貴族の所領が没収された(3000ヶ所に及ぶ) 後鳥羽、順徳、土御門 三上皇、皇位継承候補の 雅成、頼仁 両親王を流罪 仲恭天皇 廃位 後鳥羽上皇所有の荘園郡は幕府に没収されたのち後高倉院(上皇となる)に寄進された。</p> <p>幕府は朝廷の求めに応じて皇位継承にも口を挟むようになった。</p>



登場人物	役者	どんな人？
公 暁	寛 一朗	頼家とつつじの間に生まれる、乳母夫は義村、父頼家は北条によってその座を追われ公暁5歳の時に暗殺された。公暁は12歳で出家、近江の園城寺に入り公胤僧正の下で修行、鎌倉殿の跡目を望みながら鎌倉へ戻った、祖母政子の意向により鶴岡八幡宮寺別当となる。千日参籠と称して引きこもった公暁はひそかに父頼家が暗殺されたことを知る。
源 仲章	生田斗真	公家、鎌倉幕府の在京御家人、実朝の教育係。後鳥羽上皇に仕える御白河法皇の近臣源光遠の子、義時の殺害計画の黒幕 計画の露見なく幕府でも、朝廷でも昇進する。
慈 円	山寺宏一	愚管抄の筆者、歌人、幼少の時代に出家。摂政関白 藤原忠通の子、親幕派の公卿 久条兼美は兄、兼美の庇護のもとで天台座主となる、後鳥羽上皇の護持僧として公家社会とも関わる、上皇の倒幕計画に反対する、
北条朝時	西本たける	義時の次男、母は比奈(比企能員の姪)、女性問題で実朝の勘気に触れ謹慎処分を受ける。和田合戦での手柄を認められ許される。“承久の乱”では北陸道の大將軍を務める。
千 世	加藤小夏	後鳥羽上皇のいとことして 実朝の御台所に迎えらる。実朝は千世を大切にしつつも愛情表現に乏しく距離を置く、なかなか子をなす事の出来ない千世は実朝に側室を置くように進言、そんな千世に実朝は真実を明かし以後二人の絆は強まる、実朝の没後千世は出家し京都に戻る。
の え	菊池凜子	義時の三番目の妻、官人出身の伊賀氏の祖伊賀朝光の娘、13人の宿老二階堂行政は のえの母方の祖父、義時へ接近を図る目的で引き合わせ後、義時の妻となる、義時との間に子供が生まれると権勢を子供達に期待し、野心をむき出す。
鶴 丸 (平盛綱) 初	きづき 菊池桃子	北条家の家人、八田知家の身を寄せた後、義時と八重の下で育つ、成人して泰時(後の頼時)の右腕として心から信頼して支えてゆく。 北条泰時の妻、三浦義村の娘、義時の最初の妻八重の愛情を受けて育つ義時の軋轢に悩む泰時を励まし支えてゆく。
トウ	山本千尋	修善寺の農家に生まれた、トウの両親は鎌倉を追われて修善寺に幽閉された範頼と親しく交流していた。そこに頼朝の命で梶原景時が差し向けた刺客、善児の刃で範頼は殺害された。善児の犯行の一部始終を目撃していたトウは善児に引き取られ殺戮の技を仕込まれ育つ。善児の後継者として義時に仕え、様々な密命をこなす。

出 事 事	ど ん な 事 ？
実朝の死 (1219 年) 後継が決まる 政子が尼將軍となる	雪の降る夜拝賀式は予定通り始まったが、参籠している筈の公暁はいない太刀持ちとして実朝に従った筈の義時は行列から外れ仲章に替わってる、公暁の不信な行動、危険を感じた泰時が知らせに行った義時、義村は動こうともせず泰時の動きにたちはだかった、こんな雰囲気の中で 公暁は銀杏の木陰から飛び出し“覚悟！、阿闍梨公暁、親の敵を討ったぞ”と、太刀持ち(義時から替わった)、実朝に憎しみに満ちた刃を向けていった。 第四代鎌倉殿として 九条道家の3男(頼経)が決まるも年齢若干2歳につき元服に至るまで政子が代理を務める 呼び名は”尼將軍“

<p>承久の乱後の体制 義時の死(1224年)</p>	<p>朝廷と幕府は立場が逆転する 戦から戻った義時は泰時や時房と積る話をしている時、不意に昏倒するも大事に至らず妻ののえが進める煎じた薬草をしぶしぶ飲む 後義時が運慶に作らせた自分に似た仏像“阿弥陀如来”が完成、それを見て邪鬼の顔が付いた像だと怒って突然倒れにみ帰らぬ人となった。</p>
<p>新体制の成立 評定衆制度のスタート 御成敗式目制定 (1232年)</p>	<p>義時死の翌年、四代目鎌倉殿は元服、1225年政子の死に合わせて新体制評定衆が成立、執権、連署を含む 11人の有力御家人の合議体制 執権、連署と共に重事の決定、訴訟の裁断 評定の場における無私と公平そして評定衆として連帯責任を誓う</p>

年表 (鎌倉幕府成立～千葉氏滅亡)

中央の動向	地方(下総、上総、他)動向
<p>1180年 源頼朝 挙兵</p>	<p>1126年・常重 大椎城から千葉庄へ移る 千葉開府 <ul style="list-style-type: none"> 源頼朝挙兵以降、石橋山で敗れた頼朝を逃れてきた房総の地で迎え、東国武士団を糾合し頼朝に加勢 平氏(西国)、藤原氏(東北)を掃討す、その戦功により千葉氏は全国各地に所領を得る 千葉六党(常胤子息6人)、各々所領を得て独立 常胤、鎌倉幕府成立に大きく寄与し、有力御家人として幕府を支えた </p>
<p>1192 鎌倉幕府 成立</p>	<p>1201 千葉常胤 没(84歳)</p>
<p>1199 (源頼朝 没・54歳) (1199) 1221 承久の乱, (頼朝没・1204)</p>	<p>1201 千葉常胤 没(84歳) (義時没・1224) (政子没・1225)</p>
<p>1274 (文永役) 蒙古襲来 (実朝没・1219) 1281 (弘安役) “</p>	<p>蒙古襲来の為 幕命により九州に所領のある当主は下向を命じられた、千葉氏は福岡今津浜に防塁を築く等 防戦に努めた</p>
<p>1333 鎌倉幕府 滅亡 1334 建武 新政 1335 南北朝の動乱 1392 “ 合一</p>	<p>天皇による政治復活を意図する新田義貞の動きあるも成り立たず、一方足利尊氏による足利幕府成立に向けての動きが増した <ul style="list-style-type: none"> 千葉氏は二派に別れて争う </p>
<p>1338 足利幕府 成立 (室町幕府)</p>	<p>足利尊氏派 X 新田義貞派 北朝(光明天皇) (南朝(後醍醐天皇)) 胤貞(千田、九州千葉) (貞胤(下総宗家、郡上東氏))</p>
<p>1467 応仁の乱</p>	<p>幕府は 関八州、甲斐、伊豆の10ヶ国を鎌倉府(鎌倉公方)に統治を任せた 補佐役((1438)関東管領)を置いた 代を重ねると幕府の意向を受けた関東管領と鎌倉公方の対立表面化、千葉氏を始め東国武士団もその影響を受け混乱し、永享の乱(1438)、享徳の乱(1454)に巻き込まれた結果、 1455 千葉宗家(胤直)は滅亡に至る。 1457 千葉宗家(輔胤)は居城の千葉城を本佐倉城へ移した</p>
<p>1590 小田原城(北条氏)落城 豊臣秀吉全国統一</p>	<p>1590 千葉氏(北条氏旗下) 北条氏と共に滅亡</p>
<p>1600 関ヶ原合戦 1602 徳川幕府 成立 1615 豊臣氏 滅亡</p>	



就任順	名前	父/母	生年/没年	就任期間	出身
1	北条時政	父：北条時兼 母：伴為房娘	生：保延四年(一一三八) 没：建保三年(一二二五)	建仁三年(一二〇三)十月 久安二年(一二〇五)閏七月	得宗家
2	北条義時	父：北条時政 母：伊東祐親娘	生：貞元元年(一一六三) 没：元仁元年(一二二四)	元久二年(一二〇五)閏七月 貞心三年(一二三四)六月十三日	得宗家
3	北条泰時	父：北条義時 母：阿波局	生：寿永二年(一一八三) 没：仁治三年(一二四二)	貞心三年(一二三四)六月二十八日 仁治三年(一二四二)六月十五日	得宗家
4	北条経時	父：北条時氏 母：安達景盛娘	生：元仁元年(一二二二) 没：寛元四年(一二四六)	仁治三年(一二四二)六月十五日 寛元四年(一二四六)三月二十三日	得宗家
5	北条時頼	父：北条時氏 母：安達景盛娘	生：嘉祿三年(一二二七) 没：弘長三年(一二六三)	寛元四年(一二四六)三月二十三日 康元元年(一二五六)十一月二十二日	得宗家
6	北条長時	父：北条重時 母：平基親娘	生：寛喜二年(一二三〇) 没：文永元年(一二六四)	康元元年(一二五六)十一月二十二日 文永元年(一二六四)七月三日	赤橋流
7	北条政村	父：北条義時 母：伊賀朝光娘	生：元久二年(一二〇五) 没：文永十年(一二七三)	文永元年(一二六四)八月十一日 文永五年(一二六八)三月五日	政村流
8	北条時宗	父：北条時頼 母：北条重時娘	生：建長三年(一二五一) 没：弘安七年(一二八四)	文永五年(一二六八)三月五日 弘安七年(一二八四)四月四日	得宗家
9	北条貞時	父：北条時宗 母：安達景盛娘	生：文永八年(一二七二) 没：心長元年(一二三二)	弘安七年(一二八四)四月四日 正安三年(一二三〇)八月二十二日	得宗家
10	北条師時	父：北条宗政 母：北条政村娘	生：建治元年(一二七五) 没：心長元年(一二三二)	正安三年(一二三〇)八月二十二日 心長元年(一二三二)九月二十一日	宗政流
11	北条宗宣	父：北条宣時 母：北条時広娘	生：正元元年(一二五九) 没：正和元年(一二三二)	心長元年(一二三二)十月三日 心長二年(一二三二)五月二十九日	大仏流
12	北条熙時	父：北条為時 母：不詳	生：弘安二年(一二七九) 没：正和四年(一二三五)	心長三年(一二三二)六月二日 正和四年(一二三五)七月十二日	政村流
13	北条基時	父：北条時兼 母：不詳	生：弘安九年(一二八六) 没：元弘三年(一二三三)	正和四年(一二三五)七月十二日 正和五年(一二三六)七月九日	普恩寺流
14	北条高時	父：北条貞時 母：安達景宗娘	生：嘉元元年(一二三〇) 没：元弘三年(一二三三)	正和五年(一二三六)七月十日 正中三年(一二三六)二月十三日	得宗家
15	北条貞頼	父：北条頼時 母：遠藤為俊娘	生：弘安元年(一二七八) 没：元弘三年(一二三三)	正中三年(一二三六)三月十六日 三月十六日	金沢流
16	北条守時	父：北条久時 母：北条宗頼娘	生：永仁三年(一二九五) 没：元弘三年(一二三三)	嘉暦元年(一二三六)四月二十四日 元弘三年(一二三三)五月十八日	赤橋流

鎌倉将軍九代の履歴書

代数	名前	父/母	生年/没年	将軍就任年・退任年
初代	源頼朝	源義朝 由良御前(藤原季範娘)	生：久安三年(一一四七) 没：建久十年(一一九九)	就任：建久三年(一一九二) 5年 退任：建久十年(一一九九) 1年
二代	源頼家	源頼朝 北条政子	生：寿永元年(一一八二) 没：元久元年(一二〇四)	就任：建仁二年(一二〇二) 1 退任：建仁三年(一二〇三)
三代	源実朝	源頼朝 北条政子	生：建久三年(一一九二) 没：建保七年(一二一九)	就任：建仁三年(一二〇三) 16 退任：建保七年(一二一九)
四代	藤原(九条)頼経	藤原(九条)道家 藤原(西園寺)倫子	生：建保六年(一二二八) 没：建長八年(一二五六)	就任：嘉祿二年(一二二六) 18 退任：寛元二年(一二四四)
五代	藤原(九条)頼嗣	藤原(九条)頼経 大高殿(藤原親能娘)	生：延応元年(一二三九) 没：建長八年(一二五六)	就任：寛元二年(一二四四) 8 退任：建長四年(一二五二)
六代	宗尊親王	後醍醐天皇 平棟子	生：仁治三年(一二四二) 没：文永十一年(一二七四)	就任：建長四年(一二五二) 14 退任：文永三年(一二六六)
七代	惟康親王	宗尊親王 藤原(近衛)幸子	生：文永元年(一二六四) 没：嘉暦元年(一二三六)	就任：文永三年(一二六六) 23 退任：正応二年(一二八九)
八代	久明親王	後深草天皇 藤原(三條)房子	生：建治二年(一二七六) 没：嘉暦三年(一二三八)	就任：正応二年(一二八九) 19 退任：徳治三年(一二三〇)
九代	守邦親王	久明親王 惟康親王娘	生：正安三年(一二三〇) 没：元弘三年(一二三三)	就任：延慶元年(一二三〇) 25 退任：元弘三年(一二三三)

鎌倉期天皇家略系図

※数字は即位順

